

---

# 誕生日

春崎やよい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誕生日

### 【著者名】

春崎やよい

### 【データ】

N1318E

### 【あらすじ】

今日は、志保の誕生日！！新一は、哀に内緒で誕生日の用意を進めていた。そのことは、哀自身も忘れていて・・うれし恥ずかしの誕生日！！初めての短編です！！

朝起きたとき確かに博士の声が聞こえた  
でも、何かがおかしい

不自然すぎるほど、騒がしい

哀は、研究室のベッドの上で田を覚ました  
リビングに上がる階段を上がっていくところには、ありえない光景  
が広がっていた

「灰原おはよっ

新一が阿笠邸にいた

ありえないわ。だつて、彼は今学校にいるはず  
でも、こうして博士の家に来ているじゃない  
頭の中では、理解していてもこつ田の前に立つていて  
哀は、今の状態をどう説明すればいいのかわからなかつた。  
新一は、階段の前でぼーと立つていてる哀の前に來た  
「「」飯でかいるぜ?」

「ええ、そうね」

考えているものを払い、食卓に着いた  
頂きますの合図をして、朝ご飯を食べ始めた  
一体、彼は何を企んでるのかしら?謎だわ  
食べ始めてすぐにさつき考えていることをまた繰り返した  
哀は、このことを聞かずには、いられなかつた

「ねえ、工藤君。どうして、此処にいるの?学校は?」

「え、あ、それは・・・」

新一は、じどうもじうこなりながら答えておつとしている  
哀は、それをみてもういいわと言つた  
どうせ、はぐらかされるのが落ちだわ  
哀は、ご飯を食べ終わり、片付けようとしたとき新一に止められた  
「灰原、片付けなくていいって。俺がやるから」

「何言つていいの？此処は、阿笠博士の家であつて、私が後片付けをやるのは、当たり前でしょ？」

少しきつめの口調で言った。

新一は、何もしないで欲しいみたいなことを言つからまるで、私が片付けさせないよつにしているわね。裏がありそだわ哀は、新一を見て聞いた

「工藤君、私が片づけをしちゃいけないとでも、言つの？」

「何言つているんだよ？今田くらいは、休んだりどうだ？家のことくらい、俺だけで充分だぜ」

新一は、哀ににこりと笑いかけた

「そうね。たまには、いいかもしれないわ」

新一がホツとしているところを哀は、見逃さなかつたやつぱり、何か隠しているわね

何を企んでいるのかは、知らないけれど

食べたものをそのままにして、哀は、リビングから出ていった部屋に戻り、出かける準備をした

たまには、外に出かける物言いかもしれない

リビングに行き、哀は、新一に出かけることを伝えた

「工藤君、出掛けるわね。帰りは、夕方くらいだと思うからそれだけ、伝えて出掛けた

何処に行こうかしらと思考を張りめぐらせた

結局いく当てもなかつたから、「デパートに行くことにした買つたりとかはしなかつたけど、見てまわるくらいだつたわ。欲しいものとかもなかつたし

お昼は、軽くミスドに寄つて食べたくらいかしら

そういうえ、ミスドに杯つて食べているときかしら、私の目の前で、色黒の男とポニー・テールの女が去つていいくのを見たのよね。誰なんか、思い出せないわ

四時くらいに家に帰宅した

「ただいま」

中には、誰もいなかつた。博士も、朝いた工藤君も  
一体、何処に行つたのかしら?

ソファに近づいたとき、人が飛び出ってきた

「哀ちゃん、お誕生日おめでとう!」

「へ?」

そう、今日は、富野志保が生まれた日なのだ。  
忘れていたわ。今日、誕生日だつたわね

だから、新一は、朝から博士の家に來ていたのだ。  
新一に呼ばれたもの、哀の友人たちが集まつていた。

阿笠邸には、蘭・博士・新一・小五郎・絵理・園子・歩美・元太・  
光彦・服部・和葉・日暮・佐藤・高木・白鳥・ジョディ・赤井・ジ  
エイムズがいた。

「工藤君、朝あなたが此処にいたのつて・・・」

「そう、灰原の誕生日を祝おうと思って、準備していたんだ」

ありがとう

心の中で、言つた。

「なるほど。だから、朝私が台所に行かせないようにしていたのつ  
て、このことだつたのね」

「気づいていたのか」

「当たり前じゃない。住んでいるのに、出入りさせないようにして  
いたんですもの」

当たり前よと哀は、ため息をついた

「でも、ありがとう。私のために」

哀は、素直に言つた。

「さあさあ、始めましょう!」

そうして、富野志保の誕生日パーティーが始まった。

工藤君、ありがとう。  
嬉しかったわ。

(後書き)

哀の姿なんですが、志保の誕生日にしました。  
哀ファンの皆さん、どうでしたか？  
評価待っていますので、よろしくおねがいします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1318e/>

---

誕生日

2010年10月19日13時38分発行